

宋代定窯白瓷の位置づけに関して

— 汝窯、南宋官窯との比較から —

The Porcelain of Ding Kilns in Song Dynasty

-An Comparison with Ru Ware and Southern Song's Guan Ware-

森達也

(愛知県陶磁美術館 主任学芸員)

Tatsuya Mori

宋・陸遊『老学庵筆記』の「故都時、定器不入禁中、惟用汝器、以定器有芒也」や宋・葉寔『垣齊筆衡』の「本朝以定州白磁有芒不堪用、遂命汝州造青窯器」という記載から、定窯の製品は北宋前期には宮廷用器として用いられたが、北宋後期には汝窯にその地位を取って代わられたとされることが多い。

確かに、五代、北宋前期の定窯白瓷には「官」、「新官」などの刻銘が見られるが(図1)、北宋後期になるとこれらの銘文は姿を消す。また、北宋中期頃に伏せ焼き技法が盛んとなり、後期には芒口の製品が多数を占める。こうした考古学的に確認されている状況と、上記2つの文献の記載内容とは一致する点が認められる。一方、近年の定窯窯址の発掘では、北宋後期の土層から「尚食局」(図2)、「尚薬局」(図3)などの宮廷にかかわる銘を持つ製品が出土しており、北宋後期にも定窯に宮廷用の什器が生産され、貢納されていた可能性が高いことが明らかとなっている。

さらに、杭州で発掘された南宋恭聖仁烈皇后宅遺跡の南宋代とされる水池からは南宋官窯青瓷、汝窯青瓷、南宋龍泉窯青瓷、高麗青磁などと共に大量の定窯白瓷が出土しておりまた宮殿や宮廷の施設名を後刻した定窯白瓷が杭州市内で数多く発見されていることから南宋の皇室や宮殿では定窯製品が盛んに用いられていたことが確認されている。

これらのことから、定窯白磁は北宋から南宋を通じて宮廷で盛んに使われていた可能性が高く、前述した『老学庵筆記』と『垣齊筆衡』の記載がどのような意味をもつのか？また、同時代に皇家のために作られたとされる汝窯と南宋官窯青瓷とどのような位置づけの差があったのか？などについて再考する必要がある。

本稿では、汝窯青瓷および南宋官窯青瓷と定窯白瓷の器種組成とを比較し、特に宮廷用器の性格を端的に示すと考えられる倣青銅礼器に着目しながら、両宋代における定窯の性格について考察を行いたい。

1 汝窯と南宋官窯の器種構成

筆者はかつて汝窯の天青色青瓷と南宋官窯青瓷の器種組成に関して考察を行い、汝窯の青瓷を四つのグループに分類した。さらに南宋官窯で追加された器種を含めると五つのグループに区分されることを論じた。

ここでは、この分類を基に考察を進めていく。

清涼寺・汝窯の発掘調査出土品と伝世汝窯を併せて考えると、成熟期の汝窯天青釉青瓷の器種には、碗、盤、楕円盤、碟、鉢、杯、托、洗、盆、盒、水仙盆、套盒、執壺、温碗、双耳瓶、梅瓶、盤口長頸瓶、長頸瓶、八稜瓶、弦文長頸瓶、蓮花形香炉、獸足香炉、鏤孔球形香炉形、三足樽、三足盤、方壺、壺、各種蓋などがある。ここでは、これらの器種を以下の四つのグループに分けて考察を進めたい。Ⅰ類：碗、盤、楕円盤、碟、鉢、杯、托、洗、盆、盒、水仙盆、套盒、執壺、温碗、双耳瓶、梅瓶、盤口長頸瓶、長頸瓶などの食器・日用容器類（図4）。Ⅱ類：盤口長頸瓶や長頸瓶、八稜瓶など西方のガラス器に祖形が求められる器種（図5）。Ⅲ類：蓮華形香炉、獸足香炉、鏤孔球形香炉形など、唐から宋頃の金銀器や青銅器を写した器種（図6）。Ⅳ類：三足樽、三足盤、方壺、壺、弦文長頸瓶など、漢代の青銅礼器を写した器種（図7）。

四つのグループに分けた汝窯の器種のうち、Ⅰ類（食器・日用容器類）は、越州窯青瓷、耀州窯青瓷、定窯白瓷などで既に生産されていた北宋代の伝統的な器種・器形の延長線上にあるが、それらをより精緻に造形したことが汝窯天青釉青瓷の特色といえる。Ⅱ類（ガラスを祖形とする器種）とⅢ類（唐・宋の金銀器や青銅器を祖形とする器種）は、晩唐から五代・北宋の越州窯青瓷、耀州窯、定窯などで、ガラス器や金銀器を写す動きが認められているが、汝窯の段階で盤口長頸瓶や蓮花炉（鳥形蓋・獸形蓋）などの新たな器種が加えられた。これらの器種は、どれも唐代から北宋代に珍重された最上質の金属工芸品やガラス工芸品が原形となっており、陶瓷器の中でも最上質の位置づけであったと考えられる。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類は、汝窯以前の越州窯、耀州窯、定窯（白瓷）など、それまでの北宋陶瓷の伝統の延長上に位置づけられる器種・器形であるが、漢代の青銅礼器を模倣したⅣ類は、北宋後期の汝窯において新たに生み出された器種・器形であり、汝窯天青釉青瓷の性格を考える上で最も重要である。北宋代に発達した金石学の強い影響下を受けて、皇帝（哲宗、徽宗）の玩古（古董趣味）の嗜好を直接的に反映して生み出されたのがⅣ類の倣漢代礼器であった可能性が極めて高いのである。

南宋官窯では汝窯のこうした器種がほぼ継承されているが、さらに鼎、方鼎、鬲、觚、尊、簋など三代（夏、商、周）青銅礼器を模倣した器種が追加された（以下「Ⅴ類」とする）（図8）。南宋官窯の倣三代礼器は、南宋初期の青銅礼器の不足を契機として生み出された可能性が高く、当初は青銅礼器の代替品として使用されたと思われるが、青銅礼器の生産が再開されると復古的な性格から玩古（古董趣味）的な性格へと変化しながら生産が続けられた。

皇帝のために生産された汝窯、南宋官青瓷のこうした器種組成にならって定窯白瓷の器種を分類し、汝窯、南宋官青瓷と比較することによって、定窯と汝窯、南宋官窯との相違点を明らかにし、宋代定窯の位置づけを明確化することができるであろう。

2 定窯白瓷と汝窯、南宋官窯青瓷の比較

定窯白瓷のⅠ類（食器・日用容器類）は、定窯白瓷の大多数を占めるグループで、碗、盤、碟、鉢、杯、托、洗、盆、盒、執壺、梅瓶、瓶などからなる。各器種の器形はバリエーションに富んでおり、汝窯や南宋官窯のⅠ類のように定型化や規格化が進んでいない。「官」、「尚食局」、「尚薬局」などの刻銘をもつものも決して飛びぬけて質が高いわけではない。「尚食局」の銘は碗などの食器類に多く（図2）、「尚薬局」は薬品を入れたと思われる合子に多く（図3）、貢納先の用途に合わせた生産が行われていたことがわかる。

Ⅱ類（西方渡来のガラス瓶を祖形とする器種）は、盤口長頸瓶を代表とするが、汝窯や南宋官窯では、規格化と定型化が進んでおり、器形や口径・器高・胴径の比率がほぼ同じ製品が作られている。一方、定窯では器形にバリエーションが多く、汝窯や南宋官窯と同じ胴部が筒形のもの（図9）のほかに、半球形（図10）や底部に高い高台が付くもの（図11、12）などがある。前者は陳国公主墓出土のイスラームガラス瓶（図13）がモデルであり、高い高台が付くものは、浙江瑞安慧光塔出土のイスラームガラス瓶（図14）を模したと考えられる。施文についても無紋のものと劃花文が施されるものの二種が認められる。

Ⅲ類（唐・宋の金銀器や青銅器を祖形とする器種）は、北宋初期の定州・静志寺塔基出土（977年）の香炉（図15）が代表的なものであるが、他に類品はほとんど見ない。

Ⅳ類（漢代の青銅礼器を模した器種）は、汝窯、南宋官窯では三足樽、三足盤、弦紋長頸瓶、壺、方壺などがあるが、定窯では器種が少なく三足樽や三足盤に限定されている。定窯白瓷の三足樽の類例は比較的多く、台北・国立故宮博物院所蔵品（口径14.4 cm）（図16）、北京・故宮博物院所蔵品（口径15.9 cm）（図17）、天津芸術博物館所蔵品（口径17.3 cm）（図18）、ストックホルム東アジア博物館（口径13.1 cm）（図19）、ボストン美術館（口径18.5 cm）（図20）、湖南省長沙市楊家山南宋墓出土品（1170年）（口径10.8 cm）（図21）、杭州・南宋恭聖仁烈皇后宅遺跡水池南宋土層出土品（図22）、定窯遺跡出土品（2009年出土、口径9.8 cm）（図23）などがある。

伝世汝窯の三足樽は大小2器種があり、ロンドン・デヴィッド財団所蔵品は口径23.7 cm、北京・故宮博物院所蔵品は口径18.0 cmで、原形である漢代の三足樽の大きさをほぼそのまま写している。ところが定窯の三足樽は口径15 cm以下のミニチュア化したものが少なくなく、汝窯青瓷に見られるオリジナルの大きさを忠実に模倣する傾向は認められない。南宋時代になると南宋官窯や龍泉窯の三足樽は小形化しはじめ、やがて三足樽は香炉としての機能を持つようになるが、定窯白瓷の三足樽の多くも香炉化した段階に位置づけられる可能性が高い。現在年代が明確な定窯白瓷三足樽は長沙市楊家山南宋墓出土品（1170年）

だけである。この資料は『中国出土瓷器全集 13 湖南湖北（張柏編，科学出版社，2008 年）』では北宋代に位置づけられて掲載されているが、口径 10.8 cm とかなり小形化が進んだ製品であり、敢えて北宋代に遡らせる必要はなく、金代に位置づけるべき資料である。また、杭州・南宋恭聖仁烈皇后宅遺跡水池は小破片であるが南宋代の地層から出土している。このように現時点で年代がある程度明らかな定窯三足樽は北宋代まで遡るものは認められないのである。

V 類（三代青銅礼器を模した製品）に位置づけられる定窯白瓷の器種は、南宋官窯と比べてかなり限定される。南宋官窯では鼎、方鼎、鬲、觚、尊、簋など商周代青銅礼器の主要な器種を忠実に再現している。一方、定窯では方壺（図 24）、簋（図 25）、鼎（図 26、27）など数種類が知られている程度である。台北・国立故宫博物院所蔵の方壺は、商周代でもかなり時代が下がる春秋・戦国の青銅方壺を模したもので、南宋官窯では類品はなく、定窯白瓷としても極めて稀な製品である。簋は南宋官窯でも類品があるが、台北・国立故宫博物院所蔵品は南宋官窯の簋とは器形が大きく異なり、最近陝西省藍田で発見された呂氏家族墓から耀州窯青瓷の簋（図 28）と近似している。呂氏家族墓は、北宋代の金石学を主導し『考古図』を著した呂大臨の一族墓で、呂氏が収集した古代の青銅礼器も出土している。この墓から出土した耀州窯青磁の青銅礼器模倣器種は、汝窯や南宋官窯のように皇家からの注文品ではなく、北宋代の著名な文人である呂大臨本人または彼の親族によって藍田県から近い距離にある耀州窯に注文した可能性が高いと考えられる。定窯白瓷の簋は、皇家との関係ではなく宋代文人の玩古意識の高まりの中で生産されたものであるかもしれない。

鼎については、近年定窯窯址で出土した胴部の破片（図 26）と遼寧省朝陽市営州路遺跡出土の獸足（図 27）がある。前者は長脚の鼎（図 29）を模したもので、南宋官窯で無文の長脚鼎はあるが、文様を施したものはなく、河南省汝州市の張公巷窯（図 30）や 12 世紀の高麗青瓷に類品が見られる。この器種が北宋代まで遡るかどうかは明確でない。獸足鼎は金代の耀州窯青瓷に類品があり（図 31）、金代に位置づけられる。

こうした状況から、定窯白瓷の V 類の製品は南宋官窯のように皇室の命によって三代青銅礼器を忠実に再現したものではなく、宋代文人の玩古意識に応じて生産された可能性が高いのである。

3 結論

北宋末から金代の定窯白瓷は、I 類の碗、皿、壺、瓶、盞、托などの日用器種、実用器種は豊富であり、当時生産された製品の大部分を占めていた。

II 類（西方のガラスを模した器種）については、さまざまな器形が見られ、汝窯青瓷の II 類のように定形化していないことがわかる。また、この器種の出現時期は、北宋代まで遡るかどうか現時点で得られている資料では明らかでなく、金代の可能性もある。

Ⅲ類は、北宋初期の例はあるが、中期以降の例は明らかでない。

Ⅳ類については、三足樽や三足盤が知られており、三足の器形は定形化している。ただし、出現時期は、北宋代まで遡るかどうかが現時点で得られている資料では明らかでなく、金代の可能性もある。汝窯のⅣ類に比べると器種が少ない。

Ⅴ類については、方壺や簋、鼎などわずかな器種が知られているのみで、汝窯の第4類に比べると器種がはるかに少ない。

筆者は汝窯・南宋官窯のⅣ類やⅤ類は、当時の皇家や宮廷の嗜好をもっとも反映した器種であると考えているが、定窯白瓷において、これらの器種が比較的乏しい状況は、定窯と皇家との位置関係が、汝窯や南宋官窯よりもやや遠かったのではないかと考えている。定窯白瓷は、北宋時代を通じて皇室や宮廷で使用され続け、南宋代になっても金の領域にある定窯の製品が杭州に大量に運ばれていることから、北宋・南宋を通じて皇室や宮廷で愛用されていたことがわかる。しかし、その位置づけは、汝窯や南宋官窯のように皇家や宮廷から直接指示を受け、皇家の嗜好に合った製品を作る宮廷と密接な関係をもった窯ではなく、宮廷に上質の実用瓷器を供給する貢窯の位置づけにあったと考えられる。

汝窯と南宋官窯の製品は定形化や規格化が高度に進んでいることから、恐らく皇家の嗜好に適った精密な「様」(注文図)が作られて生産地に送られ、その「様」に合わせて大きさ、器形のバランス、施文などが厳格に管理されていたと考えられる。こうした厳密性は皇帝の要求が直接的に窯場へ伝えられていたことを暗示している。一方、定窯は汝窯と同じく宮廷用瓷器を生産して貢納しているにもかかわらず、汝窯天青釉青瓷ほどの定形化・規格化が認められず、汝窯や南宋官窯のような厳密な管理は行われていなかったと思われる。

なお、定窯のⅣ類の生産開始時期は、北宋代まで遡るかどうかは現時点では明らかではなく、筆者は金代まで下る可能性も高いと考えている。もし金代まで下がるとすれば、北宋後期に皇家の嗜好を強く反映したⅣ類を生産していた汝窯よりも、定窯と皇家の距離は遠かったことがより明確化できるであろう。

こうしたことから、陸遊の「定器不入禁中」と葉寘の「本朝以定州白磁有芒不堪用」の記述は、定窯白瓷が北宋の政府に用いられなかったということではなく、皇帝の身边では主に汝窯天青釉青瓷が用いられたことを示していると理解すべきであり、当時の状況をかなりの的確に描写していたとすることができるのである。

本稿は2013年12月に台湾において中国語で発表した論文「宋代定窯白瓷的歴史定位與汝窯、南宋官窯之比較視點」(森達也、『故宮文物 月刊』369号、国立故宮博物院、2013年12月)の日本語版である。

註

- 1 明津速秘書本卷二 3 頁（馮先銘『中国古陶瓷文献集积』芸術家出版社 2000 年より引用）
- 2 陶宗儀（元）『南村輟耕録』卷二十九「窯器」の『垣齋筆衡』の引用に基づく。（『輟耕録』世界書局（台湾）1972 年, 446 ~ 447 頁。）
- 3 秦大樹「定窯の歴史地位及考古工作」『中国古瓷器体系 定窯』北京芸術博物館, 2012 年 9 月, 256-271 頁, 見 269 頁。
- 4 杭州市文物考古所『南宋恭聖仁烈皇后宅遺址』文物出版社 2009 年。
- 5 胡雲法、金志偉「定窯白瓷銘文與南宋宮廷用瓷之我見」『中国古代白瓷国際學術検討会論文集』上海博物館編, 上海書画出版社 2005 年, 285-306 頁。
- 6 この問題については、1997 年に蔡玫芬が文献資料を駆使しながら詳細に論じ、「有芒不堪用」という表現は当時の状況を正確には表わしていないとの結論を出しているが、ここでは別の角度から論じてみたい。蔡玫芬「論「定州白瓷器, 有芒不堪用」句的真確性及十二世紀官方瓷器之諸問題」『故宫學術季刊』1997 年, 第 15 卷 2 期, 63-102 頁。
- 7 森達也「汝窯與南宋官窯—燒造技術和器種的比較」『故宫博物院八十五華誕 宋代官窯及官窯制度国際學術研討会論文集』故宮出版社, 2012 年 8 月, 163 ~ 194 頁。
- 8 汝窯窯址の発掘報告『宝豊清涼寺汝窯』では、汝窯青瓷を「初期」と「成熟期」に分け、いわゆる伝世汝窯青瓷は成熟期に位置づけられている。
河南省文物考古研究所『宝豊清涼寺汝窯』, 大象出版社, 2008 年, 見 53、126 ~ 135 頁。
- 9 森達也「汝窯與南宋官窯—燒造技術和器種的比較」『故宫博物院八十五華誕 宋代官窯及官窯制度国際學術研討会論文集』故宮出版社, 2012 年 8 月, 163 ~ 194 頁。
- 10 汝窯や南宋官窯では陶範を多用することによって定形化、規格化が高度に進んだと考えられている。小林仁「汝窯の謎—澄泥為范の系譜」, 『国際シンポジウム北宋汝窯青磁の謎にせまる』論文集, 大阪市東洋陶磁美術館, 2010 年, 90 ~ 96 頁。
- 11 穆青「七、定窯瓷器的銘文、(二) “尚食局” “尚藥局” 款銘文」『定瓷芸術』河北教育出版社 2002 年, 170 頁。
- 12 註 9 の論文で汝窯のⅢ群の壺や方壺はオリジナルをミニチュア化して写したものであると述べたが、漢代の青銅器にはミニチュアの壺や方壺があり、汝窯の小形の壺や方壺はこうした漢代のミニチュア青銅器を忠実に模したものと訂正したい。
- 13 陝西省考古研究院「陝西藍田県五里頭北宋呂氏家族墓地」『考古』2010 年第 8 期, 46-52 頁。
- 14 北京芸術博物館編『中国古瓷器体系 定窯』中国華僑出版社, 2012 年 9 月, 124 頁 110 図。
- 15 遼寧省文物考古研究所編『朝陽營州路出土瓷器』科学出版社 2011 年, 27 頁 23 図。



图1 白瓷“官”字款碗 北宋 定窯遺址出土（『中国古瓷器体系 定窯』北京藝術博物館,2012年、图70）

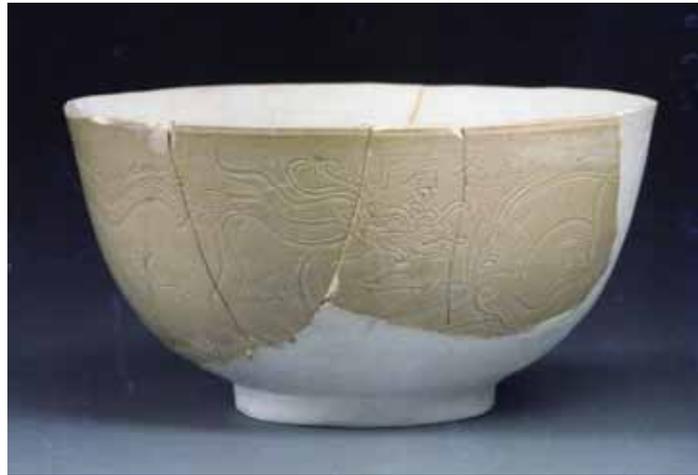


图2 白瓷“尚食局”字款碗 北宋 定窯遺址出土（『中国古瓷器体系 定窯』北京藝術博物館,2012年、图73）



图3 白瓷“尚藥局”字款盒 北宋 定窯遺址出土（『中国古瓷器体系 定窯』北京藝術博物館,2012年、图93）



図4 汝窯天青釉青瓷：Ⅰ類（北京故宮博物館藏品、国立故宮博物院藏品、イギリス・ビクトリア&アルバート美術館藏品、清涼寺汝窯遺址出土品）（『宝豊清涼寺汝窯』大象出版社,2008年、彩版213-1、231-4、206-2、203-3、104-1、110-1、109-1）



図5 汝窯天青釉青瓷：Ⅱ類（清涼寺汝窯遺址出土品）（『河南出土陶瓷』香港大學美術博物館,1997年、58頁）



图6 汝窯天青釉青瓷：Ⅲ類（清涼寺汝窯遺址出土品）（『宝豐清涼寺汝窯』大象出版社,2008年、彩版125-2、123-4）



图7 汝窯天青釉青瓷：Ⅳ類（北京故宮博物院藏品、清涼寺汝窯遺址出土品）（『兩宋瓷器（上）』商務印書館·香港,1996年、圖1、『宝豐清涼寺汝窯』大象出版社,2008年、彩版102-1、160-1、162-1、114-1）



図8 南宋官窯青瓷：V類（老虎洞窯遺址出土品）（杜正賢主編『杭州老虎洞窯址瓷器精選』文物出版社,2002年、鄧禾穎 唐俊杰『南宋史研究叢書 南宋官窯』杭州出版,2008年）



図9 白瓷盤口長頸瓶 イギリス・デイビット財団蔵（『中国の陶磁5 白磁』平凡社、1998年、図43）



図10 白瓷盤口長頸瓶 国立故宮博物院蔵 (『千禧年宋代文物大展』国立故宮博物院,2000年、図III-14)



図11 白瓷盤口長頸瓶 北京・故宮博物院蔵 (『兩宋瓷器(上)』商務印書館・香港,1996年、図35)



図12 白瓷盤口長頸瓶 国立故宮博物院蔵 (『定窯白瓷特展図録』国立故宮博物院,1987年、図20)

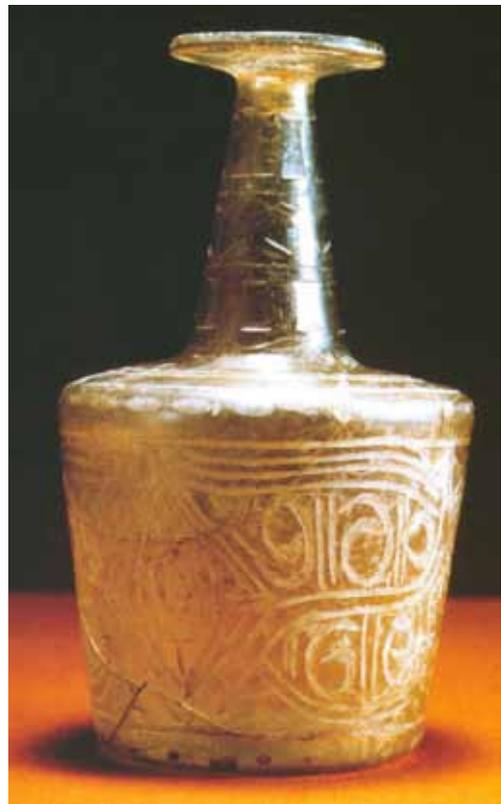


図13 イスラームガラス瓶 陳国公主墓出土 (『陳国公主墓』文物出版社,1993年)



图14 イスラームガラス瓶 浙江瑞安慧光塔出土
(『浙江省博物館』倫敦出版・香港,2013年)



图15 白瓷五足薰炉 定州静志寺塔基出土 (『中国古瓷器体系 定窯』北京藝術博物館,2012年、図104)



图 16 白瓷三足樽 国立故宫博物院所藏 (『千禧年宋代文物大展』国立故宫博物院, 2000 年、图 IV -44)



图 17 白瓷三足樽 北京·故宫博物院所藏 (『中国陶瓷全集 9 定窑』上海美術出版社, 1981 年、图 84)



図18 白瓷三足樽 天津芸術博物館（『中国文物精華大辞典 瓷器編』上海辞書出版社,1995年、図326）



図19 白瓷三足樽 ストックホルム東アジア博物館蔵（『東洋陶磁 第9巻』講談社,1980年、図119）

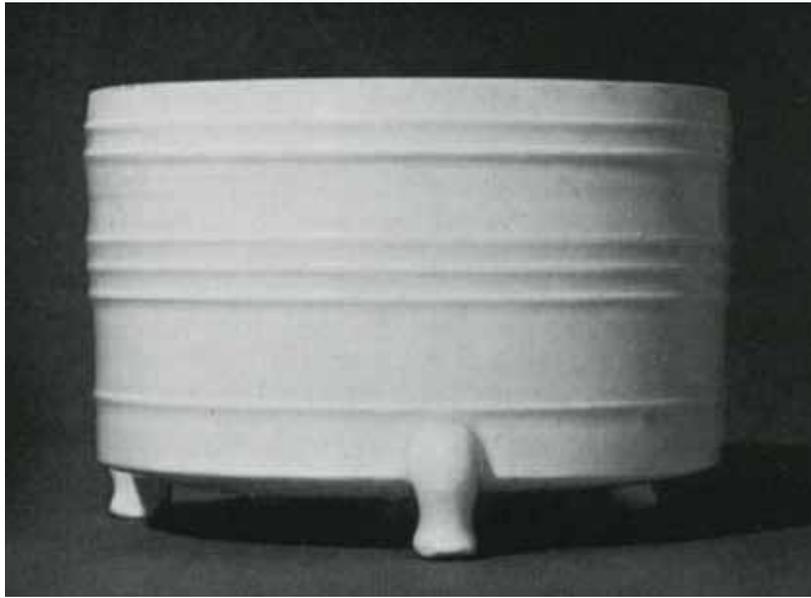


图 20 白瓷三足樽 波士顿美术馆藏(『東洋陶磁 第 11 卷』講談社,1980 年、图 140)



图 21 白瓷三足樽 湖南省长沙市杨家山南宋墓出土(『中国出土瓷器全集 13 湖南湖北』科学出版社,2008 年、图 212)



图 22 白瓷三足樽 杭州·南宋恭聖仁烈皇后宅遺跡水池南宋土層出土品
(『南宋恭聖仁烈皇后宅遺址』文物出版社,2008年、154頁1图)



图 23 白瓷三足樽 定窯遺址出土 (『中国古瓷器体系 定窯』北京藝術博
物館,2012年、图108)



图 24 白瓷方壺 国立故宫博物院藏（『千禧年宋代文物大展』国立故宫博物院,2000年、图III-15）



图 25 白瓷簋 国立故宫博物院藏（『定窯白瓷特展图録』国立故宫博物院,1987年、图18）



图 26 白瓷鼎形炉 定窑遗址出土 (『中国古瓷器体系 定窑』北京艺术博物馆,2012年、图 110)



图 27 白瓷鼎形炉 朝阳营州路遗址出土 (『朝阳营州路出土瓷器』科学出版社,2011年,27页 23图)



图 28 耀州窑青瓷簋 蓝田吕氏家族墓出土



图 29 政和鼎 北宋 国立故宫博物院藏 (『千禧年宋代文物大展』国立故宫博物院,2000年)



図 30 張公巷窯青瓷鼎形炉 私人藏（『汝窯與張公巷窯出土瓷器』科学出版社 2009 年）



図 31 耀州窯青瓷鼎形炉 金 大阪市立東洋陶磁美術館藏（『東洋陶磁の展開』大阪市立東洋陶磁美術館,1999 年）